

## 翻刻「死」

### 〈解題〉

江戸川乱歩は三重県で生まれ、少年時代を名古屋で過ごした。愛知県立第五中学校を卒業した乱歩は、父とともに朝鮮に渡る。しかしすぐに東京へ移り、早稲田大学予科へと編入することになる。

『探偵小説四十年』などにもそのあたりの事情は書かれているが、随筆集『わが夢と真実』の「父母のこと」には、その周辺について、より詳しく描かれている。乱歩の父平井繁男は、諸機械輸入販売、石炭販売、外国保険会社代理店などを業務とする平井商店を営んでいた。ところが、「明治四十五年に不況時代が来た。あてにしていた入金がなく、手形の書きかえができないようなことが続出し、僅か五年にして、平井商店は破産し、私たちは一夜にして一文なしになってしまった」。父は性格的に商売に向いていなかったらしく、事業に失敗した。乱歩は高校進学をあきら

め、父とともに朝鮮へ行くことにする。「私たちは馬山の父の旧友の家におちついて、方途を謀ったが、なかなかこれという土地もなく、一ヶ月ほど、なすこともなくすこすこうち、私はやっぱり学校へ行きたくなくなった」。「父にそのことを相談すると、それじゃやってみろと許してくれた」。苦学の覚悟を決めた乱歩は、東京へ行き、早稲田大学の予科に編入した。

乱歩は大学部では経済を専攻する。大学時代に書いたものは「ECONOMICS」と書かれた大型の封筒に入れられていて、この予科時代の作文もその袋に保存されていた。前述のような事情から、大学時代の乱歩には金銭的余裕はなかったもので、学業のかたわら仕事をし、図書館で本を読んだ。この時期の探偵小説の読書記録が手製本『奇譚』となる。その一方で、経済についても知識を深めていった。「政治学にはあまり興味がなかったが、経済原論の「欲望」とか「価値」とかいう部分が面白く、その方面の学者になりたかった」(「二十代の私」『わが夢と真実』)というだけあって、かなりの文献に目を通していたようである。「しかし、アルバイトのため充分本も読めなかったので、卒業成績は三番か四番だったが一番にはなれず、学校に残るよう勧められもせず、また自費で研究室に残る資力もなかつ

た」。

このように、乱歩の大学時代は様々なアルバイトと図書館での読書に費やされたのであった。

この時期の文章としては、以前に「センター通信」第五号（二〇一一年四月）で「一年間の早稲田生活より得たる感想」という作文を紹介している。大正元年九月〜翌二年七月、大学予科の期間に書かれたものである。今回紹介する作文「死」もそれと同時期のものである。

「一年間の早稲田生活より得たる感想」と同様、この「死」と題された作文も、「五十嵐力先生評点」とあり「90」という数字が一枚目の右上に記されている。『新国文学史』などの著書がある五十嵐力は、早稲田大学の文学科教授で、当時は予科でも教えていた。五十嵐は著名な国文学者だが、経済などに関心の向いていた当時の乱歩に与えた影響は大きくはなかったようで、乱歩の随筆などにおいて五十嵐の名前を確認することはできない。

この作文で使用されている原稿用紙には「帝國少年新聞社原稿用紙」と書かれている。これは、乱歩が大正二年三月ごろ、友人たちと少年雑誌の制作を企画したときのもの

である。この「帝國少年新聞」は、実際には刊行されなかったが、『貼雑年譜』にはその「主意書」や「地方支部について」の印刷物がそのまま貼ってあり、かなり本格的な組織づくりを目論んでいたことがうかがわれる。この作文「死」が書かれた時にはまだ、この企画は頓挫していなかったはずで、こういった用紙を使用することで「帝國少年新聞」の存在を周囲にアピールする意図があったのかとも思える。

この作文で書かれているのは、乱歩の祖母の死についてである。祖母というのは、乱歩の父平井繁男の母、和佐のことである。乱歩の祖父、平井左右衛門陳就は、藤堂家に仕えて加判奉行などを務めた人物であった。和佐はその後妻で、明治十七年に左右衛門が亡くなった後は、次男は養子に出していたため、長男の繁男とふたり暮らしとなる。間もなく繁男は関西法律学校に入学し、第一回の卒業生となるが、その間和佐は津市の寺で暮らした。繁男は明治二十五年に名張の名賀郡書記となり、和佐とふたび同居する。翌年、繁男はきくと結婚、二十七年には太郎つまり乱歩が生まれることになる。

「私の履歴書」「彼」などの乱歩の自伝的文章を見ると、

乱歩はお婆さん子として育ったことがわかる。「彼はその祖母から、祖父の生活が千石の陪臣という石高で想像する以上に派手やかなものであったことを、いろいろ聞かされた」。「彼」にはその祖母から聞いた話がいくつも書かれている。「彼」という文章は、乱歩が両親や祖父からどのような氣質を受け継いだかが書かれたものである。ところが、「不思議なことに、彼はこの最も彼を愛してくれた祖母から、何を受けついでいるかを知らないのである」と書かれている。その影響を意識的に切り取って述べることが困難であるくらいに、幼少期の彼は祖母と密着していたのである。

このため、祖母の性格的な面での影響については、「祖母は前にちよつと記した通り、なかなかの勝気ものであったこと、彼の知つてからの老年時代には、御幣かつぎで、小言幸兵衛のように口やかましかったこと、父とは反対の儉約家で、父と意見が合わなかったことなどを思い出すけれど、それらが彼の性格にどういうものを伝えているか、ほとんど考え及ばない。強いて云えば、おめかしくらいのものであろうか。」というように書いているのだった。

作文「死」には祖母の信心について書かれているが、ほとんど同様の記述が「彼」にもある。「ただ祖母だけは信心

信心ということをして口にし、先祖の祭りも大切にしたいけれど、それは一つの実作法、あるいは悪事災難よけみたいなもので、祖先を敬い、その加護によって一家の安穩を祈る以上には出でなかつた」。

「彼女は又担ぎ屋でもあつた。シ(死)の字を忌み嫌つたし、首を斬るとか首をつるとかいう言葉を聞くと「鶴亀鶴亀」と口に出して唱えた。祖母は真実その通りに考えていたのである。彼女ははなはだしく死を恐れた」。

作文「死」は、まず、死というものに恐怖を感じながらそれについて追究してみたいという思いがあることが述べられる。続いて、中学校で呼び出されてから、祖母の臨終に立ち会い、葬儀に参列した経験が描写されていく。また、葬儀の中で、祖母がどのような人物だったのか、回想が挿入されている。こういった記述が、のちの乱歩の回想的文章の下敷きになっていることは間違いないだろう。

自己分析的に両親や祖母について書いている「彼」は、作家江戸川乱歩をとらえようとするとき、非常に重要な意味を持つ。たとえば『江戸川乱歩華甲記念文集』(昭和二十九年十月)に収められている「彼 江戸川乱歩論序説」で村山徳五郎は、乱歩の「幻影の城主」としての性格をつ

くったのは「彼」で描かれたような祖母の溺愛であったと論じている。乱歩はこの村山の論を読み、「洞察の良い評論だ」と『探偵小説四十年』で紹介している。

雑誌「ぶろふいる」に「彼」が発表されるのは昭和十一年十二月、十二年二月～四月号である。つまり、作文「死」が書かれた大正元年か二年から、二十年以上を経ている。「彼」については『探偵小説四十年』には、「自伝の「彼」はアンドレ・ジイドの「一粒の麦」を読んで、生意気にも自分もああいう自己研究をやって見たいと思っているところへ、「ぶろふいる」編集室から、毎号連載の随筆をやかましく催促されたので、それを書いて見る気になった」とある。この年については「昭和十一年度は評論、随筆、序文の類を相当多量に書いている。戦争後は十年近く評論、随筆ばかり書いて暮らしたが、そういう傾向が、この年あたりからはじまっていたといってもよい」と述べ、小説以外の文章が増加する転換期でもあった。四十を越えた時期に、二十歳前の若き日に書いた作文を発展させるかのような自伝的作品を試みるわけである。

作文「死」は、単に学生時代の提出課題にとどまらず、その二十年後へ向けた蓄積として、重要な意味を持った資料と言えるのではなからうか。

落合 教幸

(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員)



死

早大豫科 十九才か

政治科乙組 百二十七

平井太郎作

我々が日常健康の誇を以て活潑に活動し、恐に種々の欲求を満たし得る時は、到底死に對する恐怖戰慄など云ふ感じを味ひ得るものでない、けれども、若し一朝朝我々が如病を得るか或は他人の死を目前に見るか、或は平生一隅に押しこめられて居た感念が勃然として起つて來る。

五十嵐の先生評云

この運動は非常な恐怖を感じたものである。僕が死か、或は平生一隅に押しこめられて居た感念が勃然として起つて來る。僕が死か、或は平生一隅に押しこめられて居た感念が勃然として起つて來る。僕が死か、或は平生一隅に押しこめられて居た感念が勃然として起つて來る。

死

早大豫科 十九才か

政治科乙組百二十七

平井太郎作

我々が日常健康の一身 誇を以て活潑に活動し、恐に種々の欲求を満たし得る時には、到底死に對する恐怖戰慄など云ふ感じを味ひ得るものでない、けれども、若し一朝「我々が」病を得るか或は他人の死を目前に見るかする時には、平生一隅に押し込められて居た感念が勃然として起つて來て反動的に非常な恐怖を感じるものである。僕は死が果して如何なるものであるかと云ふ事は残念乍ら未だ知らない、死が人間を絶對的に滅するものか或は肉体のみを亡ぼして靈魂はこれが為に却つて完全の域に進むものか、到底僕等の淺見的智識では解する事が出来ない、此の問題はコロナス時代の『地球は平なものであるか』と云ふ様な簡単な問題ではない、目を以て見、手を以て触る、ことの出来ない問題である。然し乍ら、此問題は我々の問題であるから、怎うかして其の一端なりとも発見したい解釈したいといふ感念が始終僕を苦しめて居る。死を考へる

此の出来方の問題である。然し乍ら、此  
 問題は我々の問題であるから、忘るがし  
 二其一の端なりとも登見したい解釈した  
 いといふ感念が始終僕を苦しめて居る。  
 死を考へる事は実に不快である、けれど  
 も僕は寧ろ死といふ問題に没頭して何處  
 までも此の問題を追究したいと思ふ。  
 僕が度々病に罹つた又他人の死に行く様  
 も數度見た、かゝる祖母の死を見た時ほど  
 却て死を感じた事はなかつた、今その由

時を追憶して、不快な事案は余あるが  
 思ふ出づるまゝ、死の恐怖を記して思やう  
 恐怖を感じるだけこれだけ僕等の死は計  
 する研究の歩を進めざる譯だから。  
 それが僕が或る中学校の寄宿舎に入つ  
 て居た頃で居つた、夏の事で僕等は庭  
 びテニスなどして遊んで居た、祖母が  
 病氣だと云ふ事は聞かされて居たけれど  
 又例の癩が起つたのだから位は考へて居  
 った、祖母の持病が癩であつたので、別

事は実に不快である、けれども僕は寧ろ死といふ問題に没  
 頭して何處までも此の問題を追究したいと思ふ。

僕は度々病に罹つた又他人の死に行く様も數度見た、が、  
 祖母の死を見た時ほど切に死を感じた事はなかつた、今そ  
 の當時を追憶して、不快な事案ではあるが、思ひ出づる  
 ま、死の恐怖を記して見やう恐怖を感じるだけそれだけ僕  
 等の死に対する研究の一「を」歩を進める譯だから。

それは僕が或る中学校の寄宿舎に入つて居つた頃であつ  
 た、夏の事で僕等は庭でテニスなどして遊んで居つた。祖  
 母が病氣だと云ふ事は聞いて居つたけれども又例の癩が起  
 つたのだから位に考へて居つた、祖母の持病が癩であつた  
 ので。別に外に心配など無い頃なので遊びの面白さに無中  
 に為つて居つた、運動から生ずる心地よい汗が身軀を濕し  
 て何とも云へない愉快を感じて大きな聲で叫んだり手を振  
 つて躍つたりして居つた。

最う一つうまいボールを出せば敵を斃「倒」すことが出  
 来ると意気込んでラケットを振上げた途端、『君、電話  
 だよ』と自分と呼ぶ者がある、僕は調子に乗つて居る時  
 なので『電話一つ』と大聲で「返」返事をしてすぐ其方に  
 飛んで行つた、電話と云へば家からしか懸つて来ないので  
 家は学校から一里計隔つた町にあつたので——何だら

は外に心配など無い頃なのを、  
 下に無中は居た、運命から生ず  
 る心地よい汗が身体を濡して何とも云へ  
 ない愉快を感じて大きな聲で叫んだり手  
 を振って躍ったりして居た。  
 殿う一つうまいホーレを出せと敵を  
 撃つことか出来ると意気込んでうてつとを  
 振上げ、遠く端へ「君、電話だよ！」と  
 と自分と呼ぶ音が来る、僕は細子は乗つ  
 て居る時分ので、電話機「ツ」と大騒ぎだ

返事をしして、まず其方は罷んで居た、電  
 話と云へば家からしりか懸つて来ないのだ  
 ー家の子校から「星村隣うた何はあつた  
 のびー何だろうと思ひながら電話機に  
 立つた。電話は僕に祖母の危篤を告げた  
 無論僕は取らぬのを取らぬ、すまに駈着  
 けぬかある。  
 駈着けて、玄関に靴を揃へ、ある沢山の  
 下駄を見て先づと胸をついた、狼狽して、  
 下駄など蹴散らかして、玄関に飛び上つ

うと思ひながら電話口に立つた。電話は僕に祖母の危篤を告げた無論僕は取るものも取りあはず家に駈着けたのである。

駈着けて、玄関に脱ぎ捨て、ある沢山の下駄を見て先づと胸をついた、狼狽して、下駄など蹴散らかして、玄関に飛び上つて、奥の間に行く、其處には折から來合せて居つた伯父を始めとして、父、母弟ども下女杯が死の様な沈黙の中に病人を見詰めて居つた、病人は骨と皮ばかりの長い手を夜具から突き出して横向きに寝て居つた、眼は空を見詰めて動かない少し見ぬ間に頬は非常に陥ちた、そしてもう引く息が絶えなく、なつて小鼻が開いて居つた。之を見て僕は不知不識涙が零れた、何と云ふ哀な「現」有様であらう、父母は無論眼を濡して居つた、伯父は靜かに病人の脉を取つて居つたそして「ーさん、お祖母さんは最うお眠りになるのぢやから、一度聲を掛けてあげなさい」と云つた、僕は病人に近寄つて『お祖母さーん』と二三度呼んで見たが最う病人は何の感じをも現さなかつた。病人の引く息は段々間を置くやうになつた、『医者』と僕はそつと父に尋ねて見た、父は『先刻見えたばかりぢやで………ももう迎も駄目ぢーやーらうから呼ぶにも及ぶまい』と云つて伯父の方を見た、母は『けれども』と云つて下女を走らし

紙用稿原社聞新年少國帝

て、奥の間に行くとき、其處には折から來  
 合せて居つた伯父を始めとして、父、母  
 弟ども下女杯が死の様を沈黙の中に病人  
 を見詰め居つた、病人は唇と皮ばかり  
 の長い手を夜奥から突き出して横向きに  
 寝て居つた、眼は空を見詰め動かない  
 少し見ぬ間に頬は非常に溜つた、そして  
 もろ引く息が絶え、になつて小鼻が腫  
 いて居つた。之を見て僕は不知不識涙が  
 零れた、何と云ふ哀な現有様であらう、

紙用稿原社聞新年少國帝

父母は無痛眼を濕して居つた、伯父は靜  
 かに病人の脈を取つて居つた、伯父は靜  
 かに「さん、お祖母さんは最つお賤りになる  
 のぢやから、一度聲を掛けてお話をさし  
 白と云つた、僕は病人には近寄つては  
 母さん、おと二、三度呼んで見たか、最つ病  
 人は何の感じをも現さなかつた、病人の  
 引く息は鈍々間を置くやうになつた、可  
 医者はおと僕等は「と穴は尋ねて見たか、  
 父は句先刻見えたか、おや、おや、……」

紙用稿原社聞新年少國帝

もろ煙も堅固をうらうから呼ぶはも及ぶま  
 へはと云つて伯父の方を見た、母は「け  
 れどもおと云つて下女を産らした、然し  
 医者の来る迄僕が「おと僕は甚だ危ぶ  
 まふるを得なかつた。」  
 病人の唇の色は段々見て居る中に腫れて  
 行つた、伯父は時々病人の唇の皮を引張  
 つて見た、そして靜かに水をとと絶望  
 した様を聲で母に云つた、茶碗に一杯い  
 の水と一本の刷毛の用意せられた、おと僕

た、然し医者 of 来る迄保つか怎うか僕は甚だ危ぶまざるを  
 得なかつた。

病人の唇の色は段々見て居る中に腫れて行つた、伯父は  
 時々病人の手の皮を引張つて見た、そして靜かに『水を』  
 と絶望した様な聲で母に云つた、茶碗に一杯いの水と一本  
 の刷毛が用意させられた、室は死の影で包まれた様に思は  
 れる、僕は死と云ふ事を考へながら病人の顔を熟視した、  
 病人の引く息は非常に間を置く様になつて、思ひ出した様  
 に時々深く息を引いた、僕等は伯父の言葉で、一度づつ、  
 先刻用意した刷毛で病人の唇を濕した、鼻を吸る音が目立

は思はれぬか、ちき祖めて喉かゴロノ  
と鳴つた——僕は之を聞いてハツとした  
——そしてそれか祖母の此の世に於ける  
最後の聲であつたのである。  
祖母は七十二歳を一期として此の世を去  
つたのである。  
伯父の命に依つて、僕は死人の眼を閉ざ  
させ、其時死人の顔の非常に気高くな  
つたのを見付いて、何とも云はれぬ感に  
打たれ、慥く死人は逆さ屏風の中北

死の影に包まれ、思はれる、僕は死  
と云ふ事を考へながら病人の顔を熟視し  
た、病人の顔は非常に暗く、黒く、極  
まうて、思はれぬ様に深く目を引  
いた、僕は伯父の言葉を、一度づ、  
光刻用意して研毛で病人の唇を湿した、  
鼻を湿る音が、耳に響く。  
岸に甚摩事か起るかと云ふ様な氣持で  
ハツとした、しかしながら僕は深い、沈黙に陥  
れ、一時病人の顔色が少しよくなつた  
が、

つて聞える。

今に甚摩事が起るか云ふ様な氣持でヒヤ／＼しながら皆  
は深い／＼沈黙に陥つた、一時病人の顔色が少しよくなつ  
た様に思はれたが、ちき褌めて喉がゴロ／＼と鳴つた——  
僕は之を聞いてハツとした——そしてそれが祖母の此の世  
に於ける最後の聲であつたのである。

祖母は七十二歳を一期として此の世を去つたのである。

伯父の命に依つて、僕は死人の眼を閉ざさせた、其時死人  
の顔が非常に気高くなつたのに気付いて、何とも云はれぬ  
感に打たれた、聽て死人は逆さ屏風の中に北を向いて横へ  
られた、伯父の発言によつて、白布で掩はれた死人の枕頭  
へ家傳の名刀が据えられた、かくして僕の家族は一人を失  
つたのである、永久に。

葬送は其の翌々日であつた、其日は朝からしと／＼と厭な  
雨が降つて居た、それでも四時頃になると、多くの会葬者  
は、休憩所にあつた隣家にドシ／＼詰めた。其日僕は  
位牌持ちの役目を命ぜられた、幌をかけた俥の中に位牌を  
捧げて、しづ／＼と行く柩の後に續いた、其の日の葬送は  
華やかなものであつた、父が悲しみを現はす為にか、凡て  
を大業にしたので、会葬者も數百名に上つた。

俥の中から、前を行く白張りの提灯や色々の造花などを見



紙用稿原社聞新年少國帝

を向いて横へられた。伯父の発言は、  
 く、白布で掩はれた死人の枕頭へ、お供の  
 名刀が据えられ、かくして僕の「お供」は  
 一人を失つたのである、永久に。  
 華屋は其の翌々日であつた、其日は朝か  
 らしとく、と威容雨の降つて居た、それ  
 にも四時頃になると、多くの会葬者は、  
 休憩所にある花障子にドレドレと詰めかけ  
 た。其日僕は佐藤持守の終局を命せられ  
 た、喉を引けた。僕の中は佐藤を捧けて、

紙用稿原社聞新年少國帝

しつとく、と行く極の後は續いた、其の日  
 の華屋は華やかなものであつた、その日  
 しみを現はすものは、それを大業にした  
 ので、会葬者も數百名は上つた。  
 僕の中から、お前を行く白浪りの燈籠や包  
 びの若花などを見て、僕は妙な感じに打  
 ち込まれ、雨の中をヒタヒタと歩く人足間の  
 足元を眺めて、獨り死人の生前が考へら  
 れた。僕の祖父は喜ぶ人は藤堂家はつか  
 へて、藤千石を食んで居た、一時大和奉

て、僕は妙な感じに打たれた、雨の中をヒタヒタと歩く人足間の足元を眺めて、獨り死人の生前が考へられた。僕の祖父に■一当る人は藤堂家につかへて、藤千石を食んで居た、一時大和奉行を務めて相当に評判もよかつた人で■一あつたと、秋の夜の徒然によく祖母から華やかな昔を聞かされたものである。或る夜炬燵にあたり乍ら祖母から祖母の一生の波乱を聞かされた——それは確か十三の年の冬であつたと覚える——それが怎う云ふものか今だに忘れられぬ程深く頭に沁み込んで居た。

「殿様の名代やでなア、下にー下にーつと云ふので、それは

紙用稿原社聞新年少國帝

行を替めて柳吉に評判もよかつた人で  
 つたと、秋の夜の徒然によく祖母から華  
 やかな昔を聞かされたものである。或る  
 夜炬燵にあたり乍ら祖母から祖母の一  
 の波乱を聞かされた——それは確か十三  
 の年の冬であつたと覚える——それは確  
 かなものか今だに忘れられぬ程深く頭  
 に沁み込んで居た。  
 殿様の名代やでなア、下にー下にーつ  
 と云ふので、それは僕に替わつた。白

紙用稿原社聞新年少國帝

ど、手眞似面白く話されるのであつた、祖母は大和奉行のお室様として其若い時代を華やかに送つたのである、けれども御一新以来碌を離れた一家には色々の面白からぬ事が起つて祖父の死後は、其頃まだ子供であつた僕の父を抱えて獨り淋しい後家生活をして居つたのが、又々種々の事情が生じて、遂には、父を親戚に預けて——院といふお寺の手傳とまで成り下つたのである。

紙用稿原社聞新年少國帝

と、時によると明々六つの鐘をつき、薄暗い墓場を通つて行つたものや。長い廊下をテク／＼歩くので、しまひには足に蛸が出て、これ見な、いまだに恚な跡があるに。」とお寺の生活の苦しかった事を、目に見る様に話されたそれから、父が大阪に出て苦学して居る間祖母は伊賀の田舎に獨り、其の業なつて歸るのを待つて居つた、持病の癩は其頃父の上を案じたのから起つたので、女の身で、我子を手離して獨り孤獨の生活をして居る事は余程の辛抱であつたらうと思ふ、元來祖母は勝気な方で、独身生活中種々の迫害に遇つてもビクともせず意地を張り通した程で、又色々の迫害や境遇の変化が間接に祖母をして意地張りとならしめたのである、そんな訳で祖母は死ぬる時まで勝気で通した。

『朝は四時頃に起きて、時にはよると明々六つの鐘をつきに、薄暗い墓場を通つて行つたものや。長い／＼お寺の廊下をテク／＼歩くので、しまひには足に蛸が出て、これ見な、いまだに恚な跡があるに。』とお寺の生活の苦しかった事を、目に見る様に話されたそれから、父が大阪に出て苦学して居る間祖母は伊賀の田舎に獨り、其の業なつて歸るのを待つて居つた、持病の癩は其頃父の上を案じたのから起つたので、女の身で、我子を手離して獨り孤獨の生活をして居る事は余程の辛抱であつたらうと思ふ、元來祖母は勝気な方で、独身生活中種々の迫害に遇つてもビクともせず意地を張り通した程で、又色々の迫害や境遇の変化が間接に祖母をして意地張りとならしめたのである、そんな訳で祖母は死ぬる時まで勝気で通した。



紙用稿原社聞新年少國帝

の身で、我子を年離して、独り孤独の生活をして居る可は余程の辛抱であり、思ふ、元来祖母母は勝氣な方で、神身生活種種の迫害に遇つてもビクともせず意地を張り通した程で、又色々の家室や境況の變化が同様に祖母をして意地張りとならしめたのである、そんを訣て祖母は死ぬる時まで勝氣で通した。

一方勝氣な性質に對して祖母は御常平の御常平の性情のあり、死ぬると云ふ

紙用稿原社聞新年少國帝

言葉を發すると、面々縁起の悪い事を云ふおと云つて叱つた、或る時僕が夏夏の人形の首を断つて、象首の眞似をして遊んだ事があった、それを見て祖母は相當に立腹した、そして「お前も未だどうも、お前も神佛の神佛は始終懈らなかつた、毎日廿一日にはお大師様に詣でた、毎水所の神社にも参つた、そして縁内を金尋妙長久を祈るつてあつた。然し縁を事

あつた、死ぬなど云ふ言葉を發すると直ぐ縁起の悪い事を云ふなと云つて叱つた、或る時僕が玩具の人形の首を断つて、象首の眞似をして遊んだ事があつた、それを見て祖母は非常に立腹した、そして『お前も末はどうで碌な者にはならぬじゃ』とさへ言つた。祖母は神佛「の信」一の「を」一礼 拜は始終懈らなかつた、毎月廿一日にはお大師様に詣でた、毎日近所の神社にも参つた、そして家内安全寿妙長久を祈るのであつた。然し妙な事には祖母は決してお説教を聞きに行くとは云ふ事をしなかつた、祖母の神佛礼拝は信向から来たのではなく単に自己の安全を願ふ心の遣り場に困つたのから来たのではなからうかと思はれる。だから祖母には死に對する安心が皆無であつた、佛を拜むにも『極樂浄土へ安樂往生出来ませ様に』とではなく、唯だ「寿妙長久」であつた、『家内安全』であつた。

思ふに、祖母は外、他人に對しては甚だ向意が強く剛情であつたが、内、自己の安全を庶幾ふ事には非常に臆病であつた。祖母は確かに社会に打ち勝つた、他人の迫害を打ち破つて自己を全ふした、けれども、社会の勝利者は往々にして憐れなる自己の肉体の奴隷、——生に對する見悪き藻掻きを禁じ得ざる人である。

祖母は死ぬ迄家人の勧めを退けて、髪を切らさなかつたさ

紙用稿原社聞新年少國帝

向意免如強く剛情であつたか、内、自己の安全を慮羨ふ事には非常に臆病であつた。祖母は確かには社会に打ち脱つた、他人の血を打ち破つて自己を全ふし、これ、社会の勝利者は強々にして憐れなる自己の肉依の奴隷、一途に對する見悪き藻掻きを禁じ符束る人である。祖母は死ぬ迄家人の御めを退けて、髪を切らずにたつたを、母如何に毛蒼蠅さうなのを見兼ねて髪を切らん事

紙用稿原社聞新年少國帝

は祖母は決してお説教を聞きに行くと云ふ事をしてなかつた、祖母の神佛礼拝は僕向から来たの正はなく單に自己の安全を頼ふ心の遣り場に因つたのから来たの正はなかりうかと思はれる。だから祖母は死に對する安心が皆無であつた、佛を拜表にも同極潔淨土へ安樂後生を求まらず格に正と正はなく極難唯た可壽岐長久正であつた、自家内安全正であつた。思ふに、祖母は外、他人は對しては甚だ

紙用稿原社聞新年少國帝

を勧めた時祖母は断乎として退けたといふ、まだ死なん積りでおいでたのやナア」と母は眼を濡して云ひ云ひした、又祖母は死ぬ迄哀れな啼き聲を止めなかつた、病の苦痛を感じぬ位神聖が「魔」麻痺して居つた時でもその聲は絶たなかつたさうである、ア、この唸りこれこそ祖母が生に對する哀れむべき藻掻きの聲ではなかつたらうか、僕はこれと思ふ時何とも名状し難い一種の哀感の胸をつくり、何とも

うである、母が如何にも蒼蠅さうなのを見兼ねて髪を切らん事を勧めた時祖母は断乎として「その勧めを」退けたといふ、『まだ死なん積りでおいでたのやナア』と母は眼を濡して云ひ云ひした、又祖母は死ぬ迄哀れな唸り聲を止めなかつた、病の苦痛を感じぬ位神聖が「魔」麻痺して居つた時でもその聲は絶たなかつたさうである、ア、この唸りこれこそ祖母が生に對する哀れむべき藻掻きの聲ではなかつたらうか、僕はこれと思ふ時何とも名状し難い一種の哀感が胸をつくりのである。

追憶は追憶を望んで、思ひは何時に果  
 てないか、俣は何時しか寺院の構大を門  
 の前に止まつたかである。沢山の僧侶の  
 讀經の聲も夢の様は聞き流して、会葬者  
 を返した後、又もや俣に乗って、近親の  
 人々と共に柩を護りつゝ、行く先は郊外  
 の焼き場である。  
 柩の竈に入れられた時、人々は「ワツ」と聲を揚げた、僕  
 と聲を揚げる、僕等は指揮せらるゝ儘に

その柩の上は、銀々、藁の燃えたるを投  
 げ込んだ、御坊が其の「ド」と燃えた  
 藁を投げて入れ、竈の蓋をヒタと閉  
 じた、所が蓋の隙き向から、青味をお  
 びた烟が騰々と立ち昇つた、それを見て  
 人々は一齊に袖を絞つたのである。  
 かくして一箇の人間は一沫の茶毘の煙と  
 化し去つた、而かも再び現実には相見えろ  
 事はおもひなきである。  
 祖母と云ふ一箇の人間は七十二年の間此

時しか寺院の構大な門の前に止まつたのである。沢山の僧  
 侶の讀經の聲も夢の様は聞き流して、会葬者を返した後、  
 又もや俣に乗って、近親の人々と共に柩を護りつゝ、行く先  
 は郊外の焼き場である。

柩が竈に入れられた時、人々は「ワツ」と聲を揚げた、僕  
 等は指揮せらるゝ儘にその棺の上に、銘々、藁の燃えたるの  
 を投げ込んだ、御坊が其の上へ「ドシ」と燃えた藁な  
 どを投げ入れて、竈の蓋をヒタと閉じた、閉じた蓋の隙き  
 間から、青味をおびた烟が騰々と立ち昇つた、それを見て  
 人々は一齊に袖を絞つたのである。

かくして一箇の人間は一沫の茶毘の煙と化し去つた、而  
 「して」かも再び現実に相見える事は出来ないのである。  
 祖母と云ふ一箇の人間は七十二年の間此の世に生を享け  
 て、果して何事を為し得たであらう、何物を残し得たであ  
 らう。

人々はかくして、永久の苦より永劫の未来に流るゝ時の極  
 めて少なる一点と、空より空に互つて端しなき宇宙の至つ  
 て微なる一部分とを汚す為に、此の世に生じ此の世を去る  
 のである。

思へば思ふ程、この問題は不可一解である、けれども、  
 不可解なりとして捨る事は出来ない、生のあらん限り、僕



江戸川乱歩 紹介済み資料

これまでに紹介されてきた江戸川乱歩の資料は以下のようになっている。

- 『江戸川乱歩推理文庫(57) わが夢と真実』 講談社 一九八八年  
・欺瞞系譜・探偵小説トリック分類表
- 『江戸川乱歩推理文庫(59) 奇譚／猿の言葉』 講談社 一九八八年  
・奇譚
- 『江戸川乱歩推理文庫(64) 書簡対談座談』 講談社 一九八九年  
・江戸川乱歩・井上良夫往復書簡(一部)  
・横溝正史宛書簡  
・その他書簡(森下雨村・小酒井不木など) 19通分
- 『文学』 岩波書店 第三卷第六号 二〇〇二年十一月・十二月「写真劇の優越性につきて」
- 『江戸川乱歩 誰もが憧れた少年探偵団』 河出書房新社 二〇〇三年「悪魔ヶ岩」
- 『国文学解釈と鑑賞別冊 江戸川乱歩と大衆の二十世紀』 至文堂 二〇〇四年「怪物」
- 『子不語の夢』 乱歩蔵びらき委員会 二〇〇四年 江戸川乱歩・小酒井不木往復書簡
- 『横溝正史旧蔵資料』 世田谷文学館 二〇〇四年 横溝宛江戸川乱

歩書簡 (CD-ROM)

書簡は世田谷文学館蔵、立教大学寄託資料には書簡の複写あり  
『江戸川乱歩と13の宝石』 光文社 二〇〇七年「薔薇夫人」

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

『大衆文化』

- 創刊準備号 二〇〇八年三月「二銭銅貨」草稿
- 第二号 二〇〇九年九月「D坂の殺人事件」草稿
- 第三号 二〇一〇年四月「人間椅子」草稿
- 第五号 二〇一一年四月「活動写真のトリックを論ず。」
- 第六号 二〇一一年九月「映画論」
- 第七号 二〇一二年四月「トリック写真の研究」

『センター通信』

- 創刊号 二〇〇七年一月「二銭銅貨」荒筋
- 第二号 二〇〇八年七月「中央少年」
- 第三号 二〇〇九年三月「黄色団」
- 第四号 二〇一〇年三月「試験騒ぎ」
- 第五号 二〇一一年三月「一年間の早稲田生活より得たる感想」
- 第六号 二〇一二年三月「演説」